

本棚 ぶらり



祝! 「山の日」

今年から8月11日が「山の日」として国民の祝日になりました。

山の日には「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」日ということです。

そこで、今回は読み継がれてきた定番中の定番である山岳小説とその登場人物のモデルと言われている人たちに関する作品を紹介したいと思います。

読書を通じて山々にそして登山家たちに思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

◆『神々の山嶺』(夢枕獯／著 集英社ほか)

2016年3月に公開された映画「エヴェレスト」の原作としてご存知の方も多い作品。

この小説で孤高の天才クライマーとして描かれている羽生丈二のモデルと言われているのが登山家・森田勝。彼もまた一匹狼と呼ばれた伝説のクライマーですが、その生き様を伝える作品としては『狼は帰らず-アルピニスト・森田勝の生と死-』(佐瀬稔／著 山と溪谷社ほか)が有名です。また、羽生のライバルとして登場する“長谷”のモデルと言われているのは登山家・長谷川恒男。彼も同じ著者が『長谷川恒男虚空の登攀者』(山と溪谷社)という作品で描いているので、併せて読んでみると二人の人物像の対比やモデルと実像の違いを浮かび上がらせることができるでしょう。

そして、やはりこの『神々の山嶺』で描かれている人物として重要なのがイギリスの登山家ジョージ・マロリーです。奇しくも刊行から2年後の1999年にその遭難遺体が75年の時を経て発見されたのですが、作品中でも鍵を握る“カメラ”は残念ながら発見されなかったようです。その後の検証を含めた作品が、翌2000年に自身も著名な登山家であるラインホルト・メスナーにより『マロリーは二度死んだ』(山と溪谷社)として刊行されていますので、こちらもどうぞ。



『孤高の人』

新田次郎／著
新潮社文庫(1973年)

◆『孤高の人』(新田次郎／著 新潮社)

山岳小説を数多く手掛けた新田次郎の言わずと知れた代表作。モデルは単独行で数々の登攀記録を残した登山家・加藤文太郎。大正から昭和というまだ登山が一部の裕福な人達のものだった時代に、軽装備の社会人登山家として単独行にこだわり、30年という短い生涯を駆け抜けた姿を描いています。

彼の遺稿集『単独行』は再編集され『新編 単独行』(加藤文太郎／著 山と溪谷社)として読むことができます。

同じく新田次郎の作品『銀嶺の人』(新潮社)は、女性では世界で初めてマッターホルン北壁完登を成し遂げた二人が主人公です。そのモデルは登山家・若山美子と、医師であり登山家の今井通子。若山はその6年後に遭難死していますが、今井は自身の体験や半生を『私の北壁』(朝日新聞社ほか)など多くの著書で記しています。

◆『凍』(沢木耕太郎／著 新潮社)

世界的クライマー・山野井泰史とその妻妙子がヒマラヤの難峰ギャチュン・カンに挑み、猛烈な悪天候の中での壮絶な戦いの末、奇跡の生還を果たしました。本書はノンフィクション作家の沢木があたかもその場に居合わせたような臨場感溢れる筆致で描いた作品。

この時の模様も含め、山野井泰史は自身のクライマー人生を『垂直の記憶』(山と溪谷社)や『アルピニズムと死』(山と溪谷社)で綴っています。また、沢木は後にエッセイ集『ポーカー・フェース』(新潮社)の中でも山野井夫妻の人物像に触れた豪快なエピソードを載せていますので、これらを読むといかに山野井夫妻が並外れた精神力の持ち主であるかを思い知らされます。